

■MICAMに見る2019年秋冬シューズトレンド■

ウエスタンがトレンドとして浮上するも、 全体ムードは低調

靴ジャーナリスト 大谷知子

2018年12月発行本誌186号掲載の見本市レポートの冒頭で、ヨーロッパで開催されている見本市の現状に触れたが、独・デュッセルドルフのGDSがなくなって以降、国際的に影響力を持つ見本市は、伊・ミラノのミカム（MICAM）のみといった状況になっている。

そこで今回から記事タイトルの「ヨーロッパ見本市レポート」を外し、ミカムに見るトレンドとすることにした。

●来場者は、2.5%増の4万3000人

2019年秋冬シーズンに向けたミカムは、2月10～13日に開催された。

日欧EPA（経済連携協定）は、2月1日に発効されたが、それから10日後のスタートということだ。果たしてその影響はあったのか。

気になるところだが、ミカムの来場状況を明らかにするところから始めたい。

今回の出展者数は、1304社。内訳は、イタリア716社、海外588社。公式発表は、増減には触れていないが、プレゼンテーション・スペースが増えている。前回から設けられた“Emerging Designers”は、新人デザイナーを紹介するエリアだが、今回は12人を取り上げた。さらに新たにスニーカーにスポットを当てた“PLUG Mi”を、7号館に登場させた。

来場者数は、2.5%増の約4万3000人と



セキュリティチェックが導入されたメイン入口



新人デザイナー紹介の「Emerging Designers」

発表された。増加をもたらしたのは、イタリアの来場者。海外は、減少した。ミカムを主催するイタリア靴メーカー協会会長は、「この数字は、来場者のダイナミクスが変化しつつあること、並びにイタリアへのプロモーションの必要性を示唆している」とコメントしている。

スペインでは、今春からショールーム形式の新展示会「ShoesRoom by MOMAD」

がスタートした。来場者は、スペイン語を公用語とする南米各国を含む約2700人だったが、主催に関わるスペイン靴工業会のスタッフが「ShoesRoom」は国内向けの展示会と言っていたことが、頭をよぎった。今後は、インターナショナルよりドメスティックなのだろうか。

●生産&輸出は、金額微増・数量微減

では、イタリア靴産業の状況は、どうなっているのだろうか。

【表1】は、イタリア靴産業全体の2018年1～10月の実績（速報値）だ。生産と輸出を見ると、金額は、生産が前年同期比0.7%増、輸出は同4.2%増だが、数量は共に2%台の減。なんとか前年レベルを維持したといったところだろう。

しかし産地の状況を見ると、決して良くはない。工場は約200社、雇用者数は約1000人減少している。2019年春夏のレポートで著名メーカーの倒産が起こっていることを書いたが、そんな状況を反映した数字になっている。

【表2】は、輸出国別の状況だ。トップはフランス。古くは米国、1980年代はドイツになり、2000年頃からフランスが取って

代わった。

2位のスイスは、5年ほど前から順位を上げている。表にまとめたデータは、イタリア靴メーカー協会が加盟する、ファッション関連組合の統合組織コンフィンダストリア・モーダがまとめたものだが、解説の項に「スイスは主要なハイブランドの物流基地としての機能を果たしている」とある。その役割が高まっていることが、順位を押し上げている。2018年も前年同期比17.1%増（金額）と高い伸びを示しており、ハイブランドの靴売上げの好調さを窺わせる。なお、スイスはEUに加盟していないが、農産物と食品を除いてEUと自由貿易関係を築いている。

3位は、ドイツ。以下、米国、英国と続くが、一時、イタリア靴輸出を牽引していたロシアは、金額、数量ともに二ケタの落ち込みとなっている。クリミア問題による経済制裁、その報復措置による落ち込みから回復は示したが、元の好調に戻れていないようだ。

そのロシアと好対照を見せるのが、9位の中国。金額、足数ともに20%近い増を示している。しかし、中国本土への中継点の役割を果たしてきた香港は、金額、足数共

【表1】2018年のイタリア靴産業

		2017年	2018年（速報値）	前年同期比
生産	金額（100万€）	7,797.56	7,849.94	+0.7%
	数量（100万足）	190.7	185.7	-2.6%
輸出	金額（100万€）	9,195.55	9,578.47	+4.2%
	数量（100万足）	211.1	206.3	-2.3%
輸入	金額（100万€）	4,655.14	5,129.36	+10.2%
	数量（100万足）	333.9	336.3	+0.7%
工場数（社）		4,708	4,505	-4.3%
雇用者数（人）		76,600	75,680	-1.2%

データ出所：Confindustria Moda Research Center

※2018年生産は加盟メンバー調査結果に基づく予測値

※2018年輸出・輸入はISTAT（イタリア国家統計局）データに基づく推定値

【表2】イタリア2018年輸出国別ランキング

順位 (金額)	2018年1～10月			前年同期比%		
	金額(100万€)	数量(1000足)	平均単価(€)	金額	数量	平均単価
1) フランス	1,245.02	29,011	42.92	+9.4%	-6.7%	+17.3%
2) スイス	1,172.65	13,482	86.98	+17.1%	+14.2%	+2.5%
3) ドイツ	886.71	30,020	29.54	+2.7%	+2.0%	+0.7%
4) 米国	760.16	12,715	59.78	-0.6%	+5.8%	-6.0%
5) 英国	528.73	10,815	48.89	+6.5%	+1.6%	+4.8%
6) スペイン	294.21	9,250	31.81	+1.5%	-7.7%	+10.0%
7) ロシア	293.33	4,927	59.53	-12.8%	-14.3%	+1.8%
8) 香港	272.69	1,781	153.09	-8.4%	-6.9%	-1.6%
9) 中国	235.65	1,936	121.70	+19.7%	+18.0%	+1.4%
10) オランダ	203.75	5,332	38.21	-0.4%	-13.7%	+15.4%
11) ベルギー	194.83	4,597	42.38	-7.1%	-11.6%	+5.0%
12) 韓国	167.17	1,497	117.70	+10.3%	+6.7%	+3.4%
13) 日本	161.30	2,097	76.93	-5.2%	-2.2%	-3.1%
14) オーストリア	151.66	4,210	36.03	+3.7%	-3.0%	+6.9%
15) カナダ	99.60	1,942	51.29	+12.9%	+21.6%	-7.1%
...						
合計	8,085.38	176,474	45.82	+3.9%	-2.3%	+6.4%

データ出所：ISTATデータに基づくConfindustria Moda Research Centerによる推計値

に落としている。数年前までは常にセットで、二国が同等、あるいは香港が中国を上回る伸びを見せていた。香港の落ち込みと中国の増加を重ね合わせると、中国の貿易政策と香港の役割の変化を想像させる。

この他では順位は低いですが、二ケタの伸びを見せているのが、韓国とカナダ。特にカナダの前年比は、足数では21.6%増とトップだ。

そして両国には共通点がある。EUと自由貿易に関わる協定を結んでいることだ。韓国とは2011年に自由貿易協定 (FTA) 発効、カナダとは2017年9月に包括的経済貿易協定 (CETA) の暫定的適用が開始された。

締結以降、韓国は、2014年頃から効果が始り、以降、金額では二ケタ増を続けている。カナダは、すぐに効果が表れ、2018

年1～5月は、足数が27.8%も伸び、年間ベースで見ても、【表2】が示すような結果になったのだ。

そこで、日欧EPAだ。日本は近年、年を追うごとに順位を落とし13位。金額5.2%、数量2.2%のいずれも減となっているが、EPAは、この状況をプラスに転じさせるように作用するのだろうか。

●ミカム日本人来場者は、EPAに懐疑的

日欧EPAへの関心が高ければ、発効直後の開催であるミカムへの来場は、増えていはずだ。

しかし来場結果をまとめたファイナルレポートが伝えるのは、米国35%増、そしてここでもカナダであり38%増。またヨーロッパからの来場では、ドイツが二ケタの落ち込みとなり、代わってスペインからの

【表3】日欧EPA発効による靴及び関連製品（輸入関税0）までの道のり

品名 基準税率	19/2/1~ 3/31	19/4/1~ 20/3/31	20/4/1~ 21/3/21	21/4/1~ 22/3/31	23/4/1~ 24/3/31	24/4/1~ 25/3/31	25/4/1~ 26/3/31	26/4/1~ 27/3/31	27/4/1~ 28/3/31	28/4/1~ 29/3/31	29/4/1~ 30/3/31	30/4/1~ 31/3/31	31/4/1~ 32/3/31	32/4/1~ 33/3/31	33/4/1~ 34/3/31	34/4/1~
【TQ対象】																
革靴 21.6%	19.6 %	17.7	15.7	13.7	11.8	9.8	7.9	5.9	3.9	2.0	0	0	0	0	0	0
皮革 16.0%	14.5 %	13.1	11.6	10.2	8.7	7.3	5.8	4.4	2.9	1.5	0	0	0	0	0	0
皮革 12.0%	10.9 %	9.8	8.7	7.6	6.5	5.5	4.4	3.3	2.2	1.1	0	0	0	0	0	0
【その他】																
体操・競技用 30.0%	28.1 %	26.3	24.4	22.5	20.6	18.8	16.9	15.0	13.1	11.3	9.4	7.5	5.6	3.8	1.9	0
コンポジションレザー 8.0%	7.3 %	6.5	5.8	5.1	4.4	3.6	2.9	2.2	1.5	0.7	0	0	0	0	0	0
紡織用繊維製 3.4%	3.1 %	2.8	2.5	2.2	1.9	1.5	1.2	0.9	0.6	0.3	0	0	0	0	0	0
甲革 25.0%	23.4 %	21.9	20.3	18.8	17.2	15.6	14.1	12.5	10.9	9.4	7.8	6.3	4.7	3.1	1.6	0

来場が躍進。スペインは、ヨーロッパでは最も重要な来場国になって来たとしている。

しかし中国、そして日本には一切触れていない。

この来場状況から見ると、日本の日欧EPAへの期待感は低いと言わざるを得ない。実際、日本人来場者に聞いたが、消極的であり、懐疑的でさえあった。

その要因は、まず関税率にあると思われる。EU側の靴輸入関税は発効と同時に撤廃されたが、日本側は、周知の通り、10年かけてゼロにするというもの。ゼロに至る年度毎の関税率は【表3】に示したが、発効日が含まれる年度の3月31日までを1年目とするという規定から現在は2年目となり、基準税率21.6%の品目の関税率は17.7%になっている。

TQ（関税割当）で輸入するより3.9%低い関税で輸入できるということであり、そこにメリットを見いださせるのがEPAだが、メリットを感じていないようだ。

その理由は、原産地証明書の存在だ。

EPAは協定が定める特惠関税で輸入するには、原産地証明書の提出が必須だ。提出がないと、これまで通り、TQ制が定め

る関税率が適用される。

原産地証明書は、言うまでもなく、製造した国・地域を証明するものだが、その決定には、いくつかの方法がある。

これまでは各地の商工会議所に申請し証明書の発給を受けるという方法が知られていた。この方法を第三者証明と言うが、日欧EPAでは、自己申告制が採用された。輸入者、輸出者、あるいは生産者のいずれかが、原産地証明書を作成し、輸入者が輸入国の税関に提出するという制度だ。

しかし例えばイタリアで製造された材料を100%使用してイタリアで製造した靴ならばイタリア原産であることは自明であり、その証明も問題ないが、グローバリゼーションが進んでいる現在、製造も国際化している。例えばアップー革はインド製、ソールは中国製、製甲はボスニア・ヘルツェゴビナで行い、最終的に靴に組み立てるのはイタリアということも十二分にあり得る。

●どのように原産地を決めるか

こんなケースに対応するために、EPAなどの貿易に関わる協定は、協定ごとに原産地に関わる規則を設けているが、日欧

EPAは、非原産材料（協定当該国・地域以外で製造された材料）を使用した製品の原産地について、次のように定めている。

①HSコード最初の2桁が変更となる加工＝CC(Change of Chapter)

HSコードは、日本語では「品目統一番号」と言い、国際貿易商品を分類するために付与される世界的統一番号であり、6桁で構成されている。その最初の二つが変更される加工がなされた場合、その製品は、その加工を行った国、あるいは地域を原産国とする、ということ。最初の2桁は「類(Chapter)」と言い、「CC」と略記される。

具体例を示すと、アッパーにインド製の革を使用したとすると、輸入の際に付されるHSコードは「41**.*」。これを靴にして輸出すると、HSコードは「64**.*」になるので、「CC」の条件を満たし、「41」が「64」となる加工を施した国、あるいは地域が原産地となる。

②HSコード最初の4桁が変更となる加工＝CTH(=Change in Tariff Heading)

具体例を示すと、HSコード「6406.10」は「甲及びその部分品（芯材を除く）」に分類されるが、その革製アッパーを輸入し、これを靴に加工するとHSコードは「6403.**」や「6404.**」となる。

このような変更に至る加工が行われた国や地域を原産国とするという意味だが、以下の条件を満たさなければならない。

HSコード「6401」～「6405」、及び「6406.90」に分類される中底が取り付けられたアッパーからの加工を除き、そして次の数値のいずれかを満たしていなければならない。

A) EXW(工場出し価格)に占める非原産材料の比率が50%以下であること

B) FOB(本船渡し価格)から非原産材料の価格の合計を引いた値を、FOBで割ったパーセンテージ(原産材料のFOBに占

める比率)が55%以上であること

途中で読みたくなくなるようなことを読ませることになっていると思うが、これを理解し、輸出者や生産者に提出書類の作成を依頼、もしくは輸入者自らが作成し提出しても、関税率は、TQを使って輸入した場合との差は、3.9%でしかない。だったら、EPAは使わない…。

これが、日欧EPAに対して消極的にさせている要因のようだ。

そして協定の効果が出て来るのは、「関税率が10%を切れば」という見方が一般的だ。10%を切るのは、9.8%となる2024年4月1日(【表3】参照)だ。日欧EPAが生きてくるのは、5年後ということになりそうだ。

■2019年秋冬靴ファッショントレンド■

では、2019年秋冬のシューズ・ファッションは、どのような傾向になるのかを見ていきたい。

●トップ・トレンドは、ウエスタン

そろそろウエスタンブーツが来るな…。そんな印象を2年ほど前から持っていたが、今回のミカムで、それがやっと現実のものとなった。レディスを中心に多くの出展者が、ウエスタンをラインナップした。



ウエスタン・ディテールをさりげなく取り入れて



中心は、ショート・ウエスタン



典型的ウエスタンは少数派

しかし“これぞ、ウエスタン”というモデルは、非常に限られた。ウエスタンブーツは、4分の3丈程度のミドル丈が典型だ。しかし、ハーフも少なく、大半が踝前後のショート。また、刺しゅう、あるいはパイソンなどを埋め込んだりして施される植物の葉をモチーフにしたようなシャフトの意匠も、シンプルな刺しゅうがいくつか見られたものの、何も施されていないものがほとんど。多くは、スカラップ型のトップライン、あるいはトップライン両サイドに取り付けられたプルストラップ、その他、シャフトとヴァンプ部分の繋ぎ目のクラウン型のカット、積み上げのセットイン・ヒールといったウエスタンのディテール・デザインをシンプルに取り入れたものだった。

素材は、2019春夏からパイソンがクローズアップされているが、その背景は、ウエスタンへの注目と見られるが、実際は、ウエスタンへの採用は非常に少ない。大半は、オイル系などの牛。従って色は、茶系のバリエーションだ。その他、素材ではスエード、色は白一色も見られた。

では、ウエスタン注目の背景は、何なのだろうか。

ここ数年、春夏、秋冬を問わず、エスニックがトレンドとして上がっているが、その対象は、徐々にアメリカ大陸へ。中でも南



パイソンは、シンプルなブーツに

米や中米の原住民にスポットライトが当たり、民族衣装に用いられるテキスタイルやその衣装をモチーフにしたデザインが見られるようになり、さらには北に向かい、ネイティブアメリカンの伝統衣装をイメージさせるディテール・デザインや意匠が見られるようになっている。

となると、思い起こされるのが、1990年前後に流行したサンタフェ・ファッション。メキシコ、ネイティブアメリカン、それにアングロサクソンの文化が融合した独特の生活文化を持つニューメキシコ州の中心都市サンタフェの風俗に着想を得た、ウエスタンとメキシカンをミックスしたようなエスニック・ファッションだ。当然、ウエスタンブーツに注目が集まり、特にショート・ウエスタンと呼ばれたブーティスタイ

ルのウエスタンがヒットした。実際に一部ではあるが、当時、ヒットしたモデルと重なるショート・ウエスタンが登場している。

●モード・テイストで履きこなす厚底

しかしウエスタンのオーダー状況はと言うと、一般的には決して芳しくないようだ。理由は「ウエスタンを合わせるコーディネートが想像しにくい」といったもの。トレンドとしては浮上したが、コーディネートしにくいファッション状況にあるということだ。「ウエスタンよりむしろエンジニアブーツのようなタイプの方が反応がいい」というコメントも聞かれたほどだ。

拡大解釈すれば、ウエスタンも、エンジニアもワークブーツとして捉えることができるし、またハイブランドのダッド系ス

ニーカーでは、シューレーシングのハトメにD環を取り入れたクライミングブーツ的なものも出ている。

ここからクローズアップできるのは、アウトドアというトレンドだ。

ミカムにおいても、スニーカーに注力するブランドには、D環を採用したハイカット、またファーをライニングに採用したり、トップラインにあしらうなどしたスノーブーツとして解釈できるモデルが見られた。

そしてこうした系統のブーツは、さらにバリエーションが広がっている。幾つかの出展者で聞かれたのが「ドクターマーチンが好調なので…」という声。しかも、8ホールの厚底というから興味深い。

もれ聞くとところによると、厚底のマーチンは、日本では従来から実績のあるモデル



エンジニア系にも注目が集まる



アウトドア感覚のダッド的スニーカー



モード系にも厚底が登場している



ロック・テイストの厚底が広がっている

だが、アメリカのセレブやインフルエンサーが履き始めたことによって、昨年からグローバルな人気モデルとなり好調を持続&拡大していると言う。

では、パンクやロック系ファッションが、トレンドなのか。

映画「ボヘミアン・ラプソディ」が異例の世界的ヒットを記録し、アカデミー賞まで受賞したことは、ファッションに全く影響を及ぼさない訳はなく、ロック・テイストは無視できない。しかしパンクに象徴されるガチガチのロックファッションでも、またダッド・スニーカーからの派生ということでもなく、モード的コーディネートで厚底が広がりそうだ。

その証拠にと言うべきか、オーセンティック系の短靴マニッシュも厚底になったり、またコバに鋌を打ったものが見られ、短靴マニッシュがハード・デザインを取り入れることによってモード化という現象もありそうだ。

●再びサイドゴアにスポットライト

では、エレガンス系ブーツは、どんな傾向か。

依然、トレンドはショートブーツだが、再びサイドゴアがクローズアップされている。この背景には、ウエスタンブーツがあ



再びクローズアップされたサイドゴア



ロングにはルーズ系のシルエットも

りそうだ。

ショートタイプのウエスタンでは、革に切れ込みを入れてゴアを仕込んだトップラインが従来から一般的だが、プルストラップを取り付けるのが難しい、あるいは取り付けたらバランスが悪くなる短さのものは、シンプルにサイドゴアに。想像をたくましくすると、こんな発想で、サイドゴアの再登場に至ったのではないか。

再びクローズアップされたサイドゴアの傾向は、エレガンス・タイプは、ルイ型の細めの中寸ヒールが特徴であり、全体の雰囲気からは中世的なクラシックが匂わないではない。またトップラインにリボン飾りをあしらったショートブーツも見られ、これを重ね合わせると、中世的要素、例えばバロックといった要素も、トレンドとしてありそうだ。

素材では、スエードが最も目立つ。トレンド素材としてマークされるパイソンは、サイドファスナーのプレーンなショートに採用のケースが目立ち、ヒール巻きもアッパーと同色のパイソンも珍しくない。

ロング系は依然として期待薄だが、シル

エットは、ルーズフィットが新しい。ストレッチ素材を中心としたニーハイは、ミカムを見た限りでは、トレンド力を失った感がある。黒のオーソドックスなタイプをラインナップしているブランドはあるが、一つのタイプとして継続しているという印象だ。ソックスブーツも同様に位置付けられ、やはり黒のオーソドックスなタイプが見られた。

しかしパリコレクションなどを見ると、上質な革製のニーハイやルーズフィットをコーディネートしているブランドが少なからず見られ、ボトムの変化を見据えつつ、今後を注目したい。

●ウエアでは、1980年代がトレンドだが…

パンプスを中心としたエレガンス物は、ほとんど話題がなかった。コレクションのレポートなどを見ると、テイラード、あるいはビッグ・ショルダーが見られ、1980年代が注目されている。これを靴に置き換えると、構築的なパンプス。つまりは肉を持ったラスト、深いトップラインを特徴としたタイプになる。このタイプのパンプスは、数シーズン前からトレンドとして提案されているが、広がりを見せておらず、今シーズンは、むしろ後退しており、ウエアのトレンドとリンクしない。オーダー面での反応は、高寸ではポイントッドトゥでトップラインは浅め、ヒールはピン系に集まっているようだ。

ローヒールでは、スクエアトゥの1960年代的なデザインが聞かれた。

最後に素材と色について補足すると、素材では、ポニーに代表される毛付きも目立ち、柄を施したものは、レオパードとゼブラが挙げられる。パンプスは、スエードを中心にパイソンの採用も見られる。

色は、パイソンは、グレーか、ピンク系



ゼブラ柄のポニーも注目素材の一つ



プレーンパンプスの味付けにパイソン

がベース。ウインターホワイトが、一部で継続。新しい傾向としては、スカイブルー的な明るいブルーにイエロー、それにパープルを組み合わせるといった明るい色の多色使いが、特にスポーツ系で見られ、今後への流れとして気になった。その他、光物もあり、ガンメタル系の暗いシルバーが傾向だ。